OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	誰デモガの文法的特徴 : 叙述類型と総称性の観点から
Author(s)	榎原, 実香
Citation	間谷論集. 2026, 20, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104780
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

誰デモガの文法的特徴

――叙述類型と総称性の観点から――

榎原　実香

〈キーワード〉 誰デモ　叙述類型　総称性　総記のガ　テンス

１．デモとガの共起

寺村(1991)、日本語記述文法研究会編(2009) をはじめとした従来の研究では、現代日本語のとりたて詞デモがガ格やヲ格の格成分をとりたてる場合、格助詞ガやヲは現れないとされてきた。しかし実際には、蓮沼(2023) によっても指摘されているように、誰デモに助詞ガが付加した (1) のような例が見られる。

(1) 市営住宅は、誰でもが入居できる住宅ではありません。(玉野市「市営住宅の申込み」https://www.city.tamano.lg.jp/soshiki/20/26985.html、2025/10/27確認)

また、一般に、否定述語と共起する誰モは、ガが付加した場合に肯定述語と共起できるようになる（日本語記述文法研究会編 2009 ほか）と言われているが、誰デモの場合、(2) のようにガが付加しても肯定否定による意味の違いは誰モほど顕著ではない[1]。

(2) この住宅は { * 誰も／誰もが／誰でも／誰でもが } 入居できる[2]。

本稿では、誰デモガがどのような特徴をもつ要素であるのかを明らかにするた

め、誰デモ（ガ）がどのような環境で現れるのか、誰デモに対して、ガがどのようなはたらきをもっているかを検討する。本稿ではまず、誰モガと誰デモ（ガ）との相違を先行研究、用例から分析することで、誰デモ（ガ）をもつ文の性質を明らかにする。その後、得られたデータから誰デモと誰デモガとの相違を分析することで、誰デモガの特徴を明らかにする。

２．誰デモガの用法

本節では、先行研究の知見を踏まえ、誰デモガがどのような文で使用されにくいのかを明らかにする。まず先行研究をもとに誰デモと誰モ（ガ）の現れる環境がどのように異なるかを確認する。次に、先行研究で明らかにされていることから、誰デモガと、誰モガ、誰デモそれぞれとが同じような環境で使用できるかどうかを検証する。

２－１．誰モガと誰デモの相違

誰モ（ガ）と誰デモの相違については、これまで多くの先行研究で論じられてきた（中西 2006、賈 2007、楊 2007、蓮沼 2023 ほか）。例えば、構文的な性質から誰デモと誰モガの相違について検討している楊(2007）では、誰デモをもつ構文は、集合の中で任意のメンバーが述語と関係が結ばれる可能性があることを示すという。楊(2007）によると、(3）(4）において誰デモが誰モガと置き換えられないのは、集合の中で任意の候補のみが述語と関係し一般的な事象を表していないためだとされる。

(3）a. インターナショナルというぐらいなので、患者さんは外国人なら誰でも来い！なんです。（山本ルミ、2014/10/28、「受付だけで大騒動 !? ｜患者さまは外国人〜インターナショナルナースのドタバタ日誌〜【1】」https://www.kango-roo.com/work/948/、2025/10/27 確認）

b. 外国人なら { * 誰もが／誰でも } 来い！

(4）a. 誰でもいいから頭数がほしいのかも。（BCCWJ [3] OC01_03676, 1400）

b. { * 誰もが／誰でも } いいから頭数がほしいのかも。

一方、誰モガをもつ構文は、集合のメンバー全てが実際に述語と同一の関係を結び、事実として表現するものだと指摘されている。(5) のように誰モガを誰デモと置き換えることができないのは、現実的な事態の報告や描写で用いられるからだという。これらの点において、先行研究では概ね共通の見解が示されている。

(5) a.「逃げろ！」日本語で叫んでいた。誰もが缶ビールを放り投げて走り出した。(BCCWJ PM52_00002, 35480)
b. { 誰もが／?? 誰でも } 缶ビールを放り投げて走り出した。

２－２．誰デモガと類似表現（誰モガ・誰デモ）の相違

次に、誰デモガと各類似表現との相違を観察する。誰デモガは、誰デモでは容認されていた (6) のような命令形、(7) のような「いい」といった述語との共起が容認されにくいことから、誰デモガは集合の中で任意の候補のみを述語と関係づけることができないと予想される。ただし、先行研究にて扱われている、容認度の差が見られる述語は「いい」、「同じ」、命令形などに限られる。

(6) 外国人なら { 誰でも／* 誰でもが } 来い！ ((3)b 参照)
(7) { 誰でも／* 誰でもが } いいから頭数がほしいのかも。((4)b 参照)

また、誰モガとも異なり、過去の出来事を述べる (8) のような例も容認されにくいことから、誰デモガは、現実的な事態の報告や描写においても用いられにくいと予想される。

(8) { 誰もが／* 誰でもが } 缶ビールを放り投げて走り出した。((5)b 参照)

しかし、(9) のような非過去の述語と共起し、メンバー全てが事実であると考えられる例を検討すると、３形式がどれも使用できる例が見られる。このことから、誰モガと誰デモ（ガ）の使用を分ける性質の区分について、楊(2007) の主

張する「現実的な事態の報告や描写」といった記述では３形式の分布差を十分説明できず、検討の余地があると考えられる。

（9）{ 誰もが／誰でも／誰でもが } 知っている名曲[4]

以上、先行研究で検証されてこなかった誰デモガは、(6)－(8) のどの用例においても容認されにくいことから、誰モガ、誰デモのどちらとも完全に一致する要素ではないことが確認された。以上の観察からは、誰デモガが過去、命令といった恒常的ではない事態の中では、使用できないことが示唆される。本稿ではこの恒常性に着目する。まず、誰デモガを有する文の性質を明らかにする上で、誰モガや誰デモとの相違が（10）に示すような叙述類型とかかわると予想し、誰デモガをもつ文の叙述の傾向をコーパスの用例から明らかにする。

（10）a. 事象叙述 : 特定の時空間に出現する事象（event）を叙述する
　　b. 属性叙述 : 所与の対象が有する属性（property）を叙述する（益岡 2021:3）

３．コーパス分析

本節では、誰デモガがどのような文に現れるかを明らかにするため、収集した誰デモガの用例を中心に、誰デモ、誰モガの用例と対照しながら分析する。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）では、デモとガが隣接しているものが 100 例見られた[5]。そのうち 96 例が「誰」、４例が「何」[6]と共起し、その全てが不定語とともに用いられるものであった。本稿では比較的用例数の多い「誰」を対象にする。また、比較対象として BCCWJ から得られた誰モガと誰デモのデータのうち、100 例をランダムに抽出し、それらの用例も併せて検討した。

３－１．述語と叙述類型

本稿では、叙述類型と誰デモガが関連するかどうかを検証する上で、述語との共起関係に着目する。叙述類型とテンスの総称性との関連性を明らかにした鈴

木(2022）では、テンスをどの時間軸においても命題が恒常的に成り立ち、特定の時間軸に結びつけられない総称（generic）テンスと、１回しか生じない事態など、特定の時間軸に結びつけられた存在（existential）テンスに二分し、(11）のように総称テンスをもつ場合、属性叙述となるという。

（11）太郎は東京出身だ。（鈴木 2022:1）

また、例えば、動詞ル形をもつ（12)a において、「犬」が「ほえる」という性質を恒常的に有していると解釈される場合、「ほえるものだ」というように、本質・傾向等を表す「ものだ」補文に生起でき（眞野 2008、鈴木 2022)、総称テンスを有するとされる。一方で、(12)b のように「明日」などの時を表す表現が付された場合は存在テンスをもち、「犬がほえる」という事象叙述となる（影山 2012、鈴木 2022)。

（12）a. 犬はほえる。（鈴木 2022:12）
　　b. 明日、犬はほえる。

本稿では、述語と誰デモガとの共起から、誰デモガをもつ文の叙述の型を明らかにしていく。まず、コーパスから抽出された誰デモガ 96 例とランダムに抽出された誰デモ、誰モガ 100 例ずつを述語のタイプ、テンス別に分類し、表１に示す。述語を形容詞・名詞 AN と動詞 V に分け、さらに総称テンスとの関連を分析するため、それらを非過去・過去に分類した。その結果、誰デモガを含めどの形式においても述語は総称テンスとなりうる非過去形動詞との共起が最も多く、誰デモでは形容詞・名詞述語の非過去形[7]、誰モガでは動詞過去形との共起の割合が比較的高い傾向にあることがわかる。また、述語タイプの割合は異なるものの、誰デモガも誰デモも非過去形の用例数が多いこと、誰モガは誰デモガ、誰デモと比べて過去形の用例数が多いことが明らかである。次節より、述語のタイプ別に実際の用例を見ながら誰デモガが生起する文を分析していく。

表１　誰デモガ・誰デモ・誰モガの共起述語タイプ別用例数

	AN 非過去	AN 過去	V 非過去	V 過去	述語なし	計
誰デモガ	5	0	87	4	0	96
誰デモ	25	1	69	3	2	100
誰モガ	5	3	64	27	1	100

３－２．形容詞・名詞述語

形容詞・名詞を述語にもつ誰デモガは５例見られ、その述語全てが非過去形であった。(13) は述語に形容詞をもち、「話すもの」が主題として現れることがわかる。誰デモガと共起する他の形容詞・名詞述語として、「実践可能」や指示表現の「そうだ」、難易を表す「利用しやすく暮らしやすい」、様態を表す「立てそう（だ）」という表現が見られ、どれも主題の属性を示すものであった。

(13) 英語が持つ“話すものは誰でもが平等である”考えが浸透している。
(BCCWJ OC05_00172, 1400)

一方、誰デモ（25 例）、誰モガ（５例）も、(14)、(15) のように非過去形形容詞・名詞述語と共起するものが見られた。誰デモについては「誰でもいい」（９例）や「誰でもない」（１例）を含むものが多かったものの、誰デモも誰モガもその全てが主題および総称テンスを有する属性叙述の例であった。

(14) ＜誕生日におめでとうメールが来ることについて＞ 嫌いな人からじゃなかったら、誰でも嬉しいです。(BCCWJ OC09_05544, 480)
(15) 子どもは本来、だれもが自分勝手なのです。(BCCWJ LBp3_00023, 13220)

過去形の形容詞・名詞述語について、誰デモでは、「誰でもよかった」と形容詞過去形と共起する例（１例）が見られた。誰モガでは、「だれもが喜色満面だった (BCCWJ LBr2_00063, 34110)」のように、状況が描写される事象叙述として用いられているものが３例見られたが、誰デモガの例は見られなかった。

以上、誰デモガと共起する非過去の形容詞・名詞述語は限られているが、全て

主題の属性を示し、過去形は見られないということが明らかとなった。一方、誰デモ・誰モガについては、わずかに、事象叙述的な過去形形容詞・名詞述語との共起が見られるものの、非過去形のものは属性叙述を示す傾向があることが明らかになった。

３－３．非過去形動詞

どの形式でも最も多く見られた非過去形動詞のうち、可能を表す述語の非過去形は「できる」と読み替えることができるもの、すなわち事物の属性や状態が実現可能かどうか（属性可能）を表す可能性がある（影山 2012）ことから、「非過去形可能動詞」として取り出し、可能を示さない「非過去形（ル形）動詞」と区別して分析する。また、多様な意味機能をもつテイル形は、３－４節にて改めて取り上げる。

３－３－１．非過去形可能動詞

抽出された用例から、誰デモガを含む節の述語として可能動詞（非過去形）をもつものが 49 例見られた。（16）は「とらばさみ」という主題をもち、「購入する」が可能の形になることで、「購入しやすい手軽なもの」という主題の属性が述べられ、属性可能として用いられていることがわかる。このように、誰デモガと共起する非過去形可能動詞 49 例は、全て主題・主名詞の属性を表しているものであった。

（16）このとらばさみは、金物店やホームセンターなどで一個千円前後でだれでもが自由に購入できます。（BCCWJ OM61_00001, 157430）

（16）が誰デモと置き換えられることからも明らかであるように、誰デモと共起する非過去形可能動詞（29 例）も同様に主題・主名詞の属性を示すものであった。

また、誰モガが非過去形可能動詞と共起する場合（10 例）も、（17）のように連体修飾節内に現れる例が多く、全て主名詞もしくは主題の属性として用いられ

ていた。

（17）今、誰もが平等に幸福を実感できる社会を具現化することの困難さ垣間見てしまう。（BCCWJ OY14_31123, 9050）

３－３－２．非過去形（ル形）動詞

誰デモガにおいて、述語が動詞ル形や「V ます」といった非過去かつアスペクトが無標の形で現れているもののうち、可能の意味を表さないものは 25 例見られた。（18）は文脈から、「モーリタニア」という主題に関して「アラビアティーを飲むような文化がある」という属性を示していることが明らかである。25 例全てが「ものだ」補文に生起でき、総称テンスをもつ用例であったことからも、属性叙述であると考えられる。

（18）a. モーリタニアでは誰でもがアラビアティーを飲む。（BCCWJ PB33_00058, 109890）
b. モーリタニアでは誰でもがアラビアティーを飲むものだ。

誰デモと共起する非過去動詞 27 例のうち 17 例は、誰デモガと同様、総称テンスをもつ傾向を示したが、（19）のように未来など非過去の特定の時と結びつけられ、明らかに事象叙述だと考えられるもの（10 例）も見られた。

（19）とにかく全員見張りして、ランプが見えたら、だれでもすぐ教えるんだよ。（BCCWJ PB39_00473, 32290）

また、誰モガとともに用いられる動詞非過去形（38 例）も、そのうちの半分ほど（20 例）が（20）のように未来や物語の中での一時点を示す事象叙述の例であった。

（20）「創造主の PC がもう一組、いただろう」誰もが振り向く。生島高と篠崎

零を。（BCCWJ LBm9_00028, 28600）

以上、誰デモガと共起する非過去（ル形）の動詞述語は属性叙述を示すが、誰デモ、誰モガにおいては非過去を表し事象叙述文として用いられている例も一定数見られ、どちらの叙述タイプにも生起する可能性があることを明らかにした。

３－４．テイル形動詞

本節では、誰デモガが動作継続や結果残存を表しうるテイル形と共起する例を示す。テイル形をもつ誰デモガは 13 例見られ、その動詞として、「知る」（７例）や「分かる」（２例）の他、「論理をもつ」、「能力を持つ」、「気づく」、「忘れる」が確認された。そのうち（21）のように「能力を持つ」「論理をもつ」を述語にもつ２例は、どの時間軸においてもその「能力・論理がある」という総称テンスをもち、誰デモガの能力を示す所有属性（益岡 2008）であると考えられる。

（21）しかし、実際は、誰でもがデザインする能力を持っている。（BCCWJ PB23_00527, 3120）

一方、「知る」「気づく」「分かる」のような認知にかかわる動詞のテイル形をもつ例（10 例）では、特定の一時点は示されていないものの、認知対象が目的格をもつ対象としてそのまま表されている（22）のような事象叙述的な例（４例）と認知対象が主題化されている（23）のような属性叙述的な例（６例）が見られ、「誰かが X を知っている」といった描写であるとも、目的語や主題に対して「X が知られている（≒有名だ）」といったように、潜在的に主題の性質を表しているとも考えられることから、これらはどちらの叙述タイプにも使用できる動詞述語であると考えることができる。

（22）だいたい平気でそういうことのできる者でない限り上級将校にはなれないということを誰でもが知っているのだ。（BCCWJ LBg9_00049, 103850）

（23）＜脳死に関する問題について＞この二つは、誰でもが気づいている

し、脳死問題を論ずる上で暗黙の前提にさえなっている。（BCCWJ LBg1_00017, 97310）

誰デモガにおいては、「忘れてる」が用いられている（24）の１例のみが、属性叙述であるとは言えない例であった。述べられた背景が明らかでないために断言できないが、この例は歌のようなリズムのあるものであり、リズムを整えるためにガが挿入されている可能性も考えられる。（＃は文の切れ目を表す。）

（24）君がいて　夢と希望　湧いてく＃誰でもが　子ども時代を　忘れてる　＃ちまき食べ　背を比べた　柱何処（BCCWJ OY03_00257, 310）

誰デモ（13 例）に関しても、述語に「知る」（８例）をもち認知されている主名詞や対象が主題化する属性叙述的な例、「（知識・能力を）もつ」（３例）を有し、所有属性を表す例の他、（25）、（26）の２例は、「ものだ」補文相当のものに生起するため、恒常的な性質だと認められ、そのどれもが属性叙述だと考えられるものであった。

（25）＜ドラマについて＞訳ありの男女の話だが、これからどう展開していくのか興味津々といった所で初回は終ったが、人間幸せそうに見えても誰でも何かしら心に問題を抱えて生きているものだ。（BCCWJ OY14_39108, 1310）
（26）誰でも自分の関心のある情報は自然と取り込まれているはずです。（BCCWJ PB56_00096, 5950）

一方、誰モガと共起するテイル形（16 例）は、「経験している（こと）」「抱えている（悩み）」といった対象を主題とする属性叙述文（２例）、誰デモと同様「知っている」をもつ属性叙述的な例（４例）の他、（27）のように動作の継続を表し、事象叙述だと考えられる例（10 例）も見られた。

(27) そこまで話してから、キッドはひと息ついて、一同を見渡した。誰もが悲劇のレゲエ・スターの妄念が取り憑いたように、呆然としたまま押し黙っている。(BCCWJ LBl9_00082, 92790)

以上、誰デモガ、誰デモ、誰モガ全てにおいて、全体で見るとテイル形と共起する割合は変わらないものの、その内訳を見ると、誰デモは属性叙述に偏る一方、誰モガは明らかに事象叙述として用いられるものが半数程度見られ、誰デモガはその中間的な位置にあることが明らかとなった。

３－５．過去形動詞

誰デモガと共起する、存在テンスをもつ過去形述語４例は全て動詞であった。そのうち３例は (28)a のように「今」に相当する語をもち、述語は全て「なった」が用いられ、変化の結果を表している。(28) の場合、二つの解釈が考えられる。一つは、(28)b のように人を主体とし、全員の経済状況が変化したことで、アルコールを飲める状況に至ったという解釈である。もう一つは、(28)c のようにアルコールの属性が変化した、という解釈である。(28)a の前の文脈では酒が話題の一つであったことから、(28)c のような、酒が時代を経て、全員が飲めるような大衆的なものに変化したという解釈は否定できない。残りの２例も、同様の解釈が可能であった。よって、文の述語は過去のテンスを表し、事象叙述を表すものの、誰デモガを含む、「なった」によって内包された節は総称テンスをもつ属性叙述に相当すると考えられる。

(28) a. これは、日本人は長い歴史の間、いつも貧乏で、酒は庶民にとっては「高嶺の花」で「ふるまわれる」とき以外には口に入らなかったといってもいいだろう。それが、今では、誰でもが毎日飲めるようになった。(BCCWJ LBe4_00006, 22370)
b. 今、みんながアルコールを毎日飲めるようになった。
c. アルコールは、今ではみんなが毎日飲めるものになった。

また、誰デモガにおいて、「なった」以外の過去形動詞をもつ（29）は属性叙述に特化した主題標識であるトイウノハ（益岡 2012）をもつため、属性叙述だと言える。（29）も「療養上の世話」を主題とし、「行ってきた」「行っている」と続くことから文全体では恒常的な事態を表していると考えられる。

（29）病気や障害をもった人の生きる営みを支える、いわゆる、患者の「療養上の世話」というのは、昔から家族であれ、家政婦であれ、誰でもが行ってきたし、また、行っている行為である。（BCCWJ PB54_00121, 12380）

一方、誰デモでは、過去形をもつ例（３例）は（30）のように「V たことがある」（２例）や、「わかったことだ」しか見られず、下記のように主名詞を主題とする属性叙述だと考えられるものであった。

（30）つまり「ワリカン」ということで、だれでも一度は経験したことのある役まわりだと思うが、どうして彼がいつもそれをやりたがるのか、はじめ私にはわからなかった。（BCCWJ OB6X_00108, 2010）

一方で、誰モガに関しては、（31）のように事象叙述として用いられている例が多く見られた（27 例中 20 例）。

（31）日本酒にはさまざまな銘柄があり、誰もがつぎつぎとちがったものを注文した。（BCCWJ PB13_00770, 29080）

誰モガの残りの７例に関しては、（32）のように、当初の属性として語用論的に解釈されるものや、「知っていた」など、認知にかかわる述語が見られ、主題が明示されていたことから属性叙述だと考えられる例であった。

（32）たしかに、マスキー法の基準をクリアすることは、当初、世界のだれも

が無理だと思っていたことなので、それをいち早くクリアしたのはたいへんなことなのですが、それ以上にすばらしいことを本田さんはやってのけた、と私は考えています。(BCCWJ OB4X_00035, 60220)

なお、誰モガには、テイル形の過去テンスであるテイタ形をもつものが（32）を含め 10 例見られたが、誰デモガ、誰デモにはテイタ形は見られなかった。

３－６．共起する述語のまとめ

以上、BCCWJ から抽出された誰デモガの叙述類型について、誰モガ、誰デモと対照しながら述語のタイプ別に分析した。述語のタイプ別傾向のまとめを表２に示す。属性叙述を示す傾向のあるものは白、事象叙述を示す傾向のあるものは黒、どちらとも共起する可能性があるものは、その割合に応じて中間色のグレーでマスを塗りつぶしている。括弧内は抽出された用例数を表す。

表２　述語タイプ別誰デモ・誰デモガ・誰モガの叙述類型比較

述語	誰デモ(98)	誰デモガ(96)	誰モガ(99)
非過去 AN	属性(16) いい(9)	属性(5)	属性(5)
非過去 可能 V	属性(29)	属性(49)	属性(10)
非過去 V ル	属性(17) 事象(10)	属性(25)	属性(18) 事象(20)
非過去 V テイル	所有属性(3) 属性(2) 知る類 : 属性的(8)	所有属性(2) 知る類 : 属性的(6) 知る類 : 事象的(4) 不明(1)	属性(2) 知る類 : 属性的(4) 知る類 : 事象的(1) 事象(9)
過去 V	属性(2) 知る類 : 属性的(1)	属性(1) 属性の変化(3)	事象(20) 知る類 : 属性的(2) 属性(語用論)(5)
過去 AN	事象(1)	なし	事象(3)

その結果、誰モガは事象叙述文、属性叙述文どちらにも生起可能であり、非過去の形容詞・名詞述語や可能動詞と共起する場合は属性叙述、非過去形動詞（ル形・テイル形）では属性叙述と事象叙述、過去形述語では事象叙述に現れる傾向があるのに対し、誰デモガや誰デモはわずかに見られる例を除き、主題の恒常的な性質を表す属性叙述の中で生起する傾向を示すことが明らかになった。ただし、誰デモガは誰デモと異なり、動詞と共起する場合、誰デモガでは、明らかに事象叙述である例が確認できなかったのに対し、誰デモでは、未来など非過去の事象を表せることが確認された。ここから誰デモガは、誰デモの属性叙述に生起する傾向をさらに高めていると考えることができる。次節では、誰デモ（ガ）がなぜ誰モガと比べて属性叙述に現れる傾向にあるのかを明らかにした上で、誰デモガと誰デモの相違に焦点を当て、誰デモガがどのような性質をもち、なぜ事象叙述をより強く制限する形式となるのかを考察する。

４．誰デモ（ガ）と総称性

第３節では、誰モガは事象叙述、属性叙述のどちらでも使用可能なのに対し、誰デモと誰デモガをもつ文は属性叙述を表す傾向があることを明らかにした。本稿において明らかになったことは、楊(2007）や蓮沼(2023）などの先行研究でも述べられているような、誰デモに関する指摘（33）と矛盾しない。

（33）「誰でも Q」は、集合に属するメンバーから任意の要素を候補として選択し、それぞれについて述語との照合を行い、どの要素であっても Q と結びつくという、条件的・選択的な関係把握に基づく全称性を表す。過去に１回的に成立した事態には使用されにくい。（蓮沼 2023:34）

では、なぜ誰デモ（ガ）は属性叙述との相性が良いのだろうか。本節では、誰モガと誰デモ（ガ）、誰デモと誰デモガの相違について、「総称性」という観点から考察する。「総称性」とは、テンスにおいては３－１節にて述べたとおり、特定の時間軸に結びつけられるものではなく、時間軸のどの時点においても、当該の命題が成り立ちうることを意味するものであり（鈴木 2022)、名詞におい

ては特定の個体ではなくある種類全体を指すものである（Carlson & Francis eds. 1995）。

４－１．条件節としての誰デモ

本節では、誰モガと誰デモ（ガ）の相違をテンスへの影響という観点から考察する。中西・平岩(2019)、Nakanishi (2021) ほかでは、誰デモを自由選択表現（free choice item）であるとし、「誰であっても」という譲歩条件節の縮約形であるという立場をとっている[8]。益岡(1993）をはじめ、条件節には主節の述語の使用に制約が生じるものがあることが一般に知られている。例えば、(34）のように「たら」や「と」は「ば」と異なり、過去に１回の事態が成立したことを表すことができる（日本語記述文法研究会編 2008)。

(34) a. 布団に入ったら、すぐに寝てしまった。（日本語記述文法研究会編 2008:108）
b. 布団に入 { ったら／ると／ * れば }、すぐに寝てしまった。

「ても」の場合、予想に反して主節の事態が起こることを比較的自由に述べることができるが、条件を表すテモ節内に不定語が現れるような構造の場合は、条件節のすべての事態において、主節の事態が成立することを表す（日本語記述文法研究会編 2008)。(35）のようにテストを行うと、不定語＋テモの条件節は特定の時間を指定する「今」などとの共起が好まれないことがわかる。これはすなわち、不定語＋テモの条件節をもつ場合は、主節において、条件節と切り離された特定の時間軸とは結びつけられにくいことを示していると言えよう[9]。

(35) a. 誰に聞いても { 知っている／わかる }。
b.* 誰に聞いても今 { 知った／考えている }。
c. 誰であっても { 知っている／わかる }。
d.* 誰であっても今 { 知った／考えている }。

このように、テモ節内に不定語が現れる場合、主節は、ある限られた時点について述べられる存在テンスよりも、すべての場合で成立するという総称テンスが好まれることがわかる。

（35）のテストは、過去形が好まれない誰デモ（ガ）においても同様の結果を得ることができる。（36）からは、誰デモ（ガ）も、誰モガと異なり「今」などとの共起が好まれないことがわかる。ここから、誰デモ（ガ）は「誰であっても」に由来する、主節のテンスへの影響が保持されていると考えることができる。誰デモが「誰であっても」から派生した要素としてテモ節の性質を引き継いでいると考えると、誰デモ（ガ）は、誰モガとは異なり、後続する述語のテンスに対して影響を与えられる要素であると説明できる。

（36）a. 誰もが今 { 知った／考えている }。
　　b.* 誰でも今 { 知った／考えている }。
　　c.* 誰でもが今 { 知った／考えている }。

４－２．誰デモと誰デモガの総称性

本節では、誰デモと誰デモガを名詞の総称性という観点から考察する。第３節では、誰デモと比べ、誰デモガが事象叙述として扱われる例がより見られにくいことを確認した。鈴木(2022）では、総称テンスを有する場合、属性叙述となることを示しているが、その文の構造内にある名詞についても、「ポチ」、「花子」といった個々を指す名詞ではなく、「犬（一般)」、「人（一般)」といった総称解釈をもつ名詞が用いられる可能性が指摘されている。鈴木(2022）では、属性叙述文内の名詞の総称解釈と総称テンスに並行性が見られることについて論じ、裸名詞主語や評価系の述語と共起する主格目的語について、総称テンスとともに生起する場合、名詞が総称解釈をもつことを指摘している。このような総称解釈をもつ名詞は、特定の個体を指すことができないため、数量表現（存在数量詞）と共起されにくい。実際に、属性叙述文に数量表現「３人」が挿入される（37)b について、「学生＝３人」という解釈では容認されない。

(37) a. 学生が３人裸足だ。(鈴木 2022:66)
b. 学生が３人正直だ。

(38) は、カラオケボックスなどの比較的小さな部屋を想定している。(38)a に示すように、誰デモは数量表現（存在数量詞）との共起が可能であり、「どのような人でも４人収容できる部屋」という意味で用いることができることから、誰デモ自体は存在解釈を有すると考えられる。一方、主語位置にある誰デモガについて、(38)b では、「誰でもが」と「部屋の定員が４人」という解釈が競合しており、誰デモガからは存在解釈が得られにくいために、数量表現と共起することができないと考えられる。ここから、誰デモは存在解釈が可能であり、総称テンスとの整合性が取れないケースがある[10]のに対し、誰デモガは存在解釈が得られず、総称テンスと競合しないと予想される。

(38) a. ここに、誰でも４人入れる部屋がある。[11]
b.*ここに、誰でもが４人入れる部屋がある。

このように、存在解釈をもつ可能性のある誰デモにガが付加されることで、誰デモの解釈が制限されると考えられる。このことは、第１節で示した命令形、「いい」、「同じ」において誰デモしか現れないことや、誰デモが非過去の事象叙述の中で生起することからも説明される。(39) のように、非過去の事象や命令形、「いい」、「同じ」をもつ文はどれも、数量表現を含めた解釈が可能であり、表現される事態についても、常に起こる可能性、１回しか起こらない可能性どちらも持ち合わせている。

(39) a. 誰でも３人来るだろう。
b. 誰でも３人来い！
c. 誰でも {いい／同じだ}（から、３人決めよう）。

これらの述語は存在解釈をもつ名詞句との共起が可能であり、誰デモも述語のテンスに影響を与えつつも、存在解釈をもつ名詞句として解釈される可能性を排除できないために非過去の事象叙述も容認されると考えられる。

４－３．誰デモと共起するガ

最後に、誰デモと結びつくガについて、これまでの観察と矛盾がないことを示す。久野(1973）をはじめ、従来主語に付加するガには「中立叙述」と「総記」の大きく２種類の用法が認められている。久野(1973）や鈴木(2022）でも言及されているとおり、総記（exhaustive listing）とは、ガが、X をとりたて、「X だけが」といった意味を表すのに対し、中立叙述（neutral description）は、「X だけが」という意味をもたず、動作・一時的状態を中立的に述べるものである。ただし、総記のガはダケとは異なり、論理的には排他性をもたないことが、青柳(1999）などによって指摘されている。以下の（40)a のような文脈の中で、総記のガのみをもつ（40)b の後に（40)d を続けることはできるが、ダケをもつ（40)c は（40)d を続けることができない。従来の総記のガが「X だけが」を表すという見方は、候補を余すことなく列挙した結果、副次的に生じるものであると考えられる。

（40）a.（クジラ、ペンギン、カモノハシのうち）何が哺乳類ですか？
　　b. クジラが哺乳類です。
　　c. クジラだけが哺乳類です。
　　d. そして、カモノハシも哺乳類です。　（青柳 1999:772）

４－２節において、誰デモはガの付加によって存在解釈をもたないことを確認した。誰デモに付加するガは、誰デモによって想定される要素を、余すところなく（exhaustive）列挙する（listing）という総記のガとして機能すると考えられるだろう。ここから、ガが誰デモと共起する場合は、ガの総記機能が誰デモの解釈に影響を与えており、誰デモが存在解釈をもつ可能性を排除していると言える。鈴木(2022）でも、属性叙述の主語をマークするガを総記解釈がなされる位置に

あるガだとしており、このことからも、誰デモに付加する総記のガによって、誰デモガが属性叙述文内に生起する可能性を高めていると考えられる。

５．おわりに

従来、現代日本語研究において議論されてこなかった誰デモガについて、本稿では、BCCWJ の用例から、誰デモ（ガ）が総称テンスをもつ属性叙述に生起する傾向があることを指摘した。そして、誰デモ（ガ）は誰モガと異なり、条件節「誰であっても」の性質が引き継がれ、述語のテンスに影響を与えうることを確認した。さらに、非過去の事象を表しうる誰デモに総記のガが付加されることで誰デモの存在解釈の可能性を排除することを述べた。誰デモガが総称テンスと結びつきやすいことから、誰デモガが属性叙述に生起するという傾向が説明されることを明らかにした。

以上、限られた用例ではあったが、従来分析の対象となっていなかった誰デモガを、叙述類型、総称性という観点から誰デモや誰モガと対照することにより、それぞれの特徴が明らかになることを示した。

注

1　本稿の目的は、誰デモガの性質を明らかにすることである。中西（2006）では、誰モも特定の条件下で肯定述語と共起することが指摘されているが、本稿では、肯定述語と共起する誰モには触れず、誰モガと、誰デモ・誰デモガとを対照することで、誰デモガの特徴を明らかにする。

2　本稿における作例の容認度について、日本語母語話者約 10 名の意見を参考に判断している。本文（2）において、誰デモガの容認度は比較的低いという意見も見られたが、実際には下記 (i) のような実例が見られる。文脈が乏しく、他形式と比べると聞き慣れないため容認度が下がったと考えられる。

(i)< シェアハウスについて > 年齢や住民票の場所、あるいは病気や要介護にも制限なく誰でもが入居できる。（宮崎和加子、2024/11/2、「朝日新聞に」http://www.miyazaki-wakako.jp/?p=2450、2025/10/27 確認）

3　『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）中納言 ver. 2.7.2、データバージョン 2021.03、国立国語研究所、https://chunagon.ninjal.ac.jp/

4　本文（9）に関連する誰デモガの用例として、下記 (ii) のような例も存在する。
(ii)「ミスティー」というタイトルを知らなくても、聴けば誰でもが知っている名曲中の名曲。（ROCKET MUSIC「ミスティー（Solo Tbn フィーチャー）吹奏楽譜」https://www.gakufu.co.jp/products/UP842、2025/10/31 確認）

5　『日本語話し言葉コーパス』（中納言 ver. 2.7.2、データバージョン 2018.01）では、デモとガが隣接している用例は 6 例見られた。いずれも「誰」と共起し、学会講演・模擬講演における独話場面で使用されていたことから、誰デモガは硬い書き言葉で用いられる傾向があると言える。文体と形式との関連についての議論は、別稿に譲りたい。

6　何デモガが見られる 4 例については、用例数が限られていることから本稿では議論の対象としないが、そのうち (iii)、(iv) の 2 例は誰デモガとは異なり、ガをもつ句が主題として現れ、事象叙述を示す形容詞述語と共起するものであった。
(iii) 実際、よく腹が減った。すると何でもがうまい。（BCCWJ LBb3_00006, 4060）
(iv) 自分の子供の初めての小学生で何でもが新鮮で、自分の時とは先生の話しぶりすら違っている。（BCCWJ PB22_00183, 12460）

7　誰デモガが誰デモと比べて形容詞・名詞述語と結びつく例が少なく、非過去形の動詞述語との共起が多く見られた点も興味深い。この割合の差は、誰デモガにおけるガが主格助詞としてもはたらき、主格を与える動詞との共起が好まれたことによるのではないかと考えられる。実際に、動詞述語と共起した誰デモガは全て主語位置にあった。

8　ただし本稿では、誰デモにガが付加できることからも、沼田（2007）と同様に誰デモが必ずしも条件節の単なる縮約形であるとは考えていない。
(v)* 誰であってもが参加できるイベント

9　「誰に聞いても当時は知らなかった」という例が言えるというコメントが得られたが、これは、「当時」という時間・期間において、「誰に聞いても知らない」という事態があったことを示すと考えられる。すなわち、「当時」は「知らなかった」だけではなく、「誰に聞いても」にもかかる要素であると考えられ、その「当時」という長い期間の中で、「誰に聞いても知らない」という事態が恒常的に成立したのではないかと考えられる。

10　誰デモが数量表現と共起する他の例として、主語位置にある例は少なかったが、実際に「誰デモ＝ x 人」と解釈できる (vi)、(vii) のような用例が見つかっている他、ゲームの参加者を募る文脈などにおいて「誰でも x 人」という使用が見られた。一方で、誰デモガがこのような数量表現と共起する例は、確認されていない。
(vi) 晩餐会を主催して、誰でも 3 人招待できるとしたら、誰を呼ぶ？（My Dear Airness 2、2015/07/22 20:49、「ハンズブローと合意」http://hisairness.blog57.fc2.com/blog-entry-2661.html?sp、2026/1/10 確認）
(vii) Duolingo の SUPER モード

3000 円くらい追加するとファミリープランに出来て、友達家族関係なく誰でも５人まで追加可能らしいので誰か入れさせて or 私が契約するから誰か招待欲しい人と思いました（X（旧 Twitter）、lee (@derailed_life)、2025/9/20 23:31、https://x.com/derailed_life/status/1969409081715933270?s=20、2026/1/10 確認）

11　本文（38）の例文について、日本語母語話者 11 名に確認したところ、そのうち９名から本文（38)a より（38)b が言いにくいというコメントを得た。残り２名は、誰デモより「ここに、誰もが４人入れる部屋がある」が容認されると回答しており、「４人のうち全員が入れる」と解釈された可能性が高い。もう一つの可能性として、この２名は 50 代以上だったのに対し、残りの９名は、30 代であった。打ち言葉である X（旧 Twitter）の利用者層は 10 代が最も多く（株式会社 NTT ドコモ モバイル社会研究所(2025)「モバイル社会白書 2025 年版」https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp25/pdf/wp25_all.pdf、2025/12/28 確認)、世代によって、文の解釈が異なる可能性も示唆された。このような解釈の違いについては、今後の課題とさせていただきたい。

参考文献

青柳宏(1999)「いわゆる「総記」のガに関する覚え書き」『アカデミア 文学・語学編』67pp.769-788

賈黎黎(2007)「不定語を用いた全部肯定の表現について―「不定語＋も」「不定語＋でも」と“疑问词＋都”を中心に―」『北陸大学紀要』第 31 号 pp.213-227

影山太郎(2012)「属性叙述の文法的意義」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版 pp.1-35

久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店

鈴木彩香(2022)『属性叙述と総称性』花鳥社

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 Ⅲ』くろしお出版

中西公子・平岩健(2019)「日本語の裸不定語―譲歩条件節における認可メカニズムを通して―」澤田治・岸本秀樹・今仁生美編『極性表現の構造・意味・機能』開拓社 pp.154-179

中西久実子(2006)「「だれも」は肯定述語と結びつかないのか―「だれも等しく教育を受ける権利を有している」―」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平２文論編』くろしお出版 pp.27-39

日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法６ 第 11 部 複文』くろしお出版

日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法５ 第９部 とりたて 第 10 部 主題』くろしお出版

沼田善子(2007)「「でも」か「で」と「も」か―「だ＋とりたて詞」の諸相―」『文藝言語研究 言語篇』52 巻 pp.37-48
蓮沼昭子(2023)「名詞句を受ける「でも」の用法特性と使用条件―「逆条件」と「例示」の接点―」『日本語日本文学』第 33 号 pp.22-51
益岡隆志(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版
益岡隆志(2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』くろしお出版 pp.3-18
益岡隆志(2012)「属性叙述と主題標識―日本語からのアプローチ―」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版 pp.91-109
益岡隆志(2021)『日本語文論要綱―叙述の類型の観点から―』くろしお出版
眞野美穂(2008)「状態述語文の時間性と叙述の類型」益岡隆志編『叙述類型論』くろしお出版 pp.67-91
楊凱栄(2007)「全称詞構文の日中対照研究―「誰でも +VP」、「誰もが +VP」と“谁 + 都 +VP”、“个个 +（都）+VP”を中心に―」彭飛企画・編『日中対照言語学研究論文集―中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴―』和泉書院 pp.371-390
Carlson, G. N. and Francis J. P. eds. (1995) *The Generic Book*, Chicago: University of Chicago Press.
Nakanishi, K. (2021) “A clausal analysis of free choice *demo* in Japanese,” *Proceedings of the Linguistic Society of America* 6(1) pp.1024-1038.

付　記

本稿は、日本語文法学会第 24 回大会における口頭発表の内容をもとに、加筆・修正を行ったものです。発表時およびその後の議論において、貴重なご指摘・ご助言を賜りました皆様、ならびに本稿の執筆にあたり調査にご協力くださった皆様に、深く感謝申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 JP23K12188 の助成を受けたものです。

エバラ　ミカ（東京科学大学リベラルアーツ研究教育院）

The Grammatical Properties of *dare-demo-ga* in Japanese
Predication Types and Genericity

EBARA Mika

In contemporary written Japanese, examples are observed in which the nominative particle *ga* attaches to *dare-demo* (“anyone”), yielding the form *dare-demo-ga*. This study aims to clarify the grammatical properties that arise from the co-occurrence of *dare-demo* and *ga*. The analysis is based on 96 tokens of *dare-demo-ga* and on 100 tokens each of *dare-demo* and *dare-mo-ga* sampled from the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ). Predicates are classified by lexical category (adjectival/nominal vs. verbal) and tense–aspect (non-past vs. past, including *-teiru* forms), and each instance is further coded as event predication or property predication. The results demonstrate that *dare-demo* and *dare-demo-ga* predominantly occur in property predications with generic tense. In contrast, *dare-mo-ga* frequently occurs in event predications, while *dare-demo* without *ga* may also permit future-oriented event predications.

This distribution is attributed to the origin of *dare-demo* in the concessive conditional clause *dare de ar-te mo* (“whoever it may be”). The semantic and syntactic properties of this conditional structure extend to *dare-demo* and are inherited by *dare-demo-ga*, thereby enabling these forms to constrain the tense interpretation of the main predicate toward generic rather than existential readings. Furthermore, a clear asymmetry is observed between *dare-demo* and *dare-demo-ga*: whereas *dare-demo* allows co-occurrence with existential quantifiers, *dare-demo-ga* does not.

The paper argues that this asymmetry results from the function of *ga* as an exhaustive listing marker. When *ga* attaches to *dare-demo*, it suppresses the existential interpretation otherwise available to *dare-demo* as an existential expression. Consequently, *dare-demo-ga* exhibits a stronger association with property predications than *dare-demo* alone. By contrasting *dare-demo-ga* with *dare-demo* and *dare-mo-ga* from the perspectives of predication type and genericity, this study shows that the grammatical characteristics of each expression can be identified.